校異源氏物語・松かせ

ひむかしの院つくりたてゝ花ちる里ときこえしうつろはし給ふにしのたゐわた
殿なとかけてまところけいしなとあるへきさまにしをかせ給ふひむかしのたい
はあかしの御かたとおほしをきてたりきたのたいはことにひろくつくらせ給て
かりにてもあはれとおほしてゆくすゑかけて契たのめ給し人ゝつとひすむへき
さまにへたて　くしつらはせ給へるしもなつかしうみところありてこまかなる
しむてんはふたけたまはす時　くわたり給ふ御すみ所にしてさるかたなる御し
つらひともしをかせ給へりあかしには御せうそこたえすいまは猶のほり給ぬへ
きことをはのたまへと女は猶わか身のほとを思ひしるにこよなくやむことなき
きはの人　くたに中　くさてかけはなれぬ御ありさまのつれなきをみつゝもの
おもひまさりぬへくきくをましてなにはかりのおほえなりとてかさしいてまし
らはむこのわか君の御おもてふせにかすならぬ身のほとこそあらはれめたまさ
かにはひわたり給ふついてをまつ事にて人わらへにはしたなきこといかにあら
むと思ひみたれてもまたさりとてかゝる所におひいてかすまへられ給はさらむ
もいとあはれなれはひたすらにもえうらみそむかすおやたちもけにことはりと
思ひなけくに中　く心もつきはてぬむかしはゝきみの御をほちなかつかさの宮
ときこえけるからうし給けるところおほゐかはのわたりにありけるをその御の
ちはか　くしうあひつく人もなくてとしころあれまとふを思いてゝかのときよ
りつたはりてやともりのやうにてある人をよひとりてかたらふ世中をいまはと
思はてゝかゝるすまひにしつみそめしかともするゑのよに思かけぬことといてきて
なんさらにみやこのすみかもとむるをにはかにまはゆき人中いとはしたなくゐ
中ひにける心ちもしつかなるましきをふるきところたつねてとなむ思よるさる
へきものはあけはたさむすりなとしてかたのこと人すみぬへくはつくろひなさ
れなむやといふあつかりこのとしころうする人ものし給はすあやしきやう
になりてはへれはしもやにそつくろひてやとりはへるをこの春のころより内の
大殿のつくらせ給ふ御たうちかくてかのわたりなむいとけさはかしうなりにて
はへるいかめしき御たうともたてゝおほくの人なむつくりいとなみはへるめる
しつかなる御ほいならはそれやたかひはへらむなにかそれもかのとのゝ御かけ

にかたかけてと思ふことありてをのつからをい　くにうちのことゝもはしてむ
まついそきておほかたの事ともをものせよといふ身つからゝうするところには
へらねとまたしりつたへたまふ人もなけれはかこかなるならひにてとしころか
くろへ侍りつるなりみさうの田畠なといふことのいたつらにあれはへりしかは
故民部大輔の君に申給はりてさるへきものなとたてまつりてなんらうしつくり
侍なとそのあたりのたくはへの事ともをあやふけに思ひてひけかちにつなしに
くきかほをはななとうちあかめつゝはちふきいへはさらにそのたなとやうの事
はこゝにしるましたゝ年ころのやうに思ひてものせよ券なとはこゝになむあれ
とすへて世中をすてたる身にてとしころともかくもたつねしらぬをその事もい
まくはしくしたゝめむなといふにも大とのゝけはひをかくれはわつらはしくて
そのゝちものなとおほくうけとりてなんいそきつくりけるかやうに思ひよるら
んともしり給はてのほらむことをものうかるも心えすおほしわか君のさてつく
　くとものしたまふを後のよに人のいひつたへんいまひときは人わろきゝすに
やとおもほすにつくりいてゝそしか　くのところをなむおもひいてたるときこ
えさせける人にましらはむ事をくるしけにのみものするはかく思ふなりけりと
心え給ふくちをしからぬ心のようういかなとおほしなりぬこれみつのあそむれい
のしのふるみちはいつとなくいろひつかうまつる人なれはつかはしてさるへき
さまにこゝかしこのようゐなとせさせ給ひけりあたりおかしうてうみつらにか
よひたるところのさまになむはへりけるときこゆれはさやうのすまゐによしな
からすはありぬへしとおほすつくらせ給ふ御たうは大かく寺のみなみにあたり
てたきとのゝ心はへなとおとらすおもしろき寺也これはかはつらにえもいはぬ
まつかけになにのいたはりもなくたてたるしんてむのことそきたるさまもをの
つから山さとのあはれをみせたりうちのしつらひなとまておほしよるしたしき
人　くいみしうしのひてくたしつかはすのかれかたくていまはと思ふにとしへ
つるうらをはなれなむことあはれに入道の心ほそくてひとりとまらんことを思
ひみたれてよろすにかなしすへてなとかく心つくしになりはしめけむ身にかと
露のかゝらぬたくひうらやましくおほゆおやたちもかゝる御むかへにてのほる
さいわいはとしころねてもさめてもねかひわたりし心さしのかなふといとうれ
しけれとあひみてすくさむいふせさのたへかたうかなしけれはよるひる思ほれ
ておなしことをのみさらはわか君をはみたてまつらては侍へきかといふよりほ
かの事なしはゝ君もいみしうあはれなりとしころたにおなしいほりにもすます
かけはなれつれはましてたれによりてかはかけとゝまらむたゝあたにうちみる

人のあさはかなるかたらひたにみなれそなれてわかるゝほとはたゝならさめるをましてもてひかめたるかしらつき心おきてこそたのもしけなけれとまたさるかたにこれこそはよをかきるへきすみかなれとありはてぬいのちをかきりに思て契すくしきつるをにはかにゆきはなれなむも心ほそしわかき人　くのいふせう思ひしつみつるはうれしきものからみすてかたきはまのさまをまたはえしもかへらしかしとよするなみにそへてそてぬれかちなり秋のころほひなれはものものあはれとりかさねたる心ちしてそのひとあるあか月に秋風すゝしくてむしのねもとりあへぬにうみのかたをみいたしてゐたるに入道れいのこやよりふかうおきてはなすゝりうちしてをこなひいましたりいみしう事いみすれとたれも

　くゝとしのひかたしわか君はいとも　くうつくしけによるひかりけむたまの心ちして袖よりほかにはなちきこえさりつるをみなれてまつはし給へる心さまなとゆゝしきまてかく人にたかへる身をいま　くしく思なからかたときみたてまつらてはいかてかすくさむとすらむとつゝみあへす

　ゆくさきをはるかにいのるわかれちにたえぬはおいの涙なりけりいともゆゝしやとてをしのこひかくすあま君

　もろともにみやこはいてきこのたひやひとり野中のみちにまとはんとてなきたまふさまいとことはりなりこゝら契かはしてつもりぬるとし月のほとを思へはかうゝきたることをたのみてすてしよにかへるも思へはゝかなしや御かた

　いきてまたあひみむことをいつとてかゝきりもしらぬよをはたのまむをくりにたにとせちにの給へとかた　くにつけてえさるましきよしをいひつゝさすかにみちのほともいとうしろめたなきけしきなり世中をすてはしめしにかゝる人のくににおもひくたりはへりしことゝもたゝ君の御ためと思ふやうにあけくれの御かしつきも心にかなふやうもやと思ひたまへたちしかと身のつたなかりけるきはの思しらるゝことおほかりしかはさらにみやこにかへりてふるすらうのしつめるたくひにてまつしきいへのよもきむくらもとのありさまあらたむることもなきものからおほやけわたくしにおこかましきなをひろめておやの御なきかけをはつかしめむ事のいみしさになむやかてよをすてつるかとてなりけりと人にもしられにしをそのかたにつけてはよう思ひはなちてけりとおもひ侍るに君のやう　くおとなひ給ひものおもほししるへきにそへてはなとかうくちをしきせかいにてにしきをかくしきこゆらんと心のやみはれまなくなけきわたりはへりしまゝに仏神をたのみきこえてさりともかうつたなき身にひかれて山かつのいほりにはましりたまはしと思ふ心ひとつをたのみ侍しにおもひよりかた

くてうれしき事ともをみたてまつりそめてもなかなか身のほとをとさまかうさまにかなしうなけきはへりつれとわか君のかういておはしましたる御すくせのたのもしさにかゝるなきさに月日をすくし給はむもいとかたしけなう契ことにおほせ給へはみたてまつらさらむ心まとひはしつめかたけれとこの身はなかくよをすてし心はへり君たちはよをてらし給ふへきひかりしるけれはしはしかゝる山かつの心をみたり給ふはかりの御契こそはありけめ天にむまるゝ人のあやしきみつのみちにかへるらむ一時に思なすらへてけふなかくわかれたてまつりぬいのちつきぬときこしめすとも後のことおほしいとなむなさらぬわかれに御心うこかし給ふなといひはなつものからけふりともならむゆふへまてわか君の御ことをなむ六時のつとめにも猶心きたなくうちませはへりぬへきとてこれにそうちひそみぬる御車はあまたつつけむもところせくかたへつゝわけむもわつらはしとて御ともの人　くもあなかちにかくろへしのふれはふねにてしのひやかにとさためたりたつのときにふなてし給ふむかしの人もあはれといひけるうらのあさきりへたゝりゆくまゝにいとものかなしくて入道は心すみはつましくあくかれなかめゐたりこゝらとしをへていまさらにかへるもなをおもひつきせすあま君はなき給

かのきしに心よりにしあま舟のそむきしかたにこきかへる哉御かた

いくかへりゆきかふ秋をすくしつゝうき木にのりてわれかへるらんおもふかたの風にてかきりけるひたかへすいり給ぬ人にみとかめられしの心もあれはみちの程もかろらかにしなしたりいへのさまもおもしろうてとしころへつるうみつらにおほえたれはところかへたる心ちもせすむかしのこと思ひいてられてあはれなることおほかりつくりそへたるらうなとゆへあるさまにみつのなかれもおかしうしなしたりまたこまやかなるにはあらねともすみつかはさてもありぬへししたしきけいしにおほせ給て御まうけのことせさせ給けりわたり給はむことはとかうおほしたはかるほとにひころへぬなか　くもの思ひつゝけられてすてしいへゐも恋しうつれ　くなれはかの御かたみのきむをかきならすおりのいみしうしのひかたけれは人はなれたるかたにうちとけてすこしひくに松風はしたなくひゝきあひたりあま君ものかなしけにてよりふし給へるにおきあかりて

身をかへてひとりかへれる山さとにきゝしににたる松風そふく御かた

ふるさとにみしよのともをこひわひてさえつることをたれかわくらんかやうにものはかなくてあかしくらすにおとゝ中　くしつ心なくおほさるれは人め

をもえはゝかりあへ給はてわたり給を女君はかくなむとたしかにしらせたてまつり給はさりけるをれゐのきゝもやあはせ給ふとてせうそこきこえ給ふかつらにみるへきことはへるをいさや心にもあらてほとへにけりとふらはむといひし人さへかのわたりちかくきゐてまつなれは心くるしくてなむさかのゝみたうにもかさりなき仏の御とふらひすへけれは二三日は侍なんときこえ給かつらの院といふところにはかにつくらせ給ふときくはそこにすへ給へるにやとおほすに心つきなけれはおのゝえさへあらため給はむほとやまちとをにと心ゆかぬ御けしきなりれいのくらへくるしき御心いにしへのありさまなこりなしと世人もいふなるものをなにやかやと御心とり給程にひたけぬしのひやかにこせむうときはませて御心つかひしてわたり給ひぬたそかれときにおはしつきたりかりの御そにやつれ給へりしたに世にしらぬ心ちせしをましてさる御心してひきつくろひ給へる御なをしすかたよになくなまめかしうまはゆき心ちすれは思ひむせへる心のやみもはるゝやうなりめつらしうあはれにてわか君をみたまふもいかゝあさくおほされんいまゝてへたてけるとし月たにあさましくゝやしきまておもほす大とのはらの君をうつくしけなりとよ人もてさはくは猶ときよによれは人のみなすなりけりかくこそはすくれたる人の山くちはしるかりけれとうちゑみたるかほのなに心なきかあいきやうつきにほひたるをいみしうらうたしとおほすめのとのくたりし程はをとろへたりしかたちねひまさりてつきころの御ものかたりなとなれきこゆるをあはれにさるしほやのかたはらにすくしつらむことをおほしのたまふこゝにもいとさとはなれてわたらむこともかたきを猶かのほいあるところにうつろひ給へとのたまへといとうゐ　くしきほとすくしてときこゆるもことはりなりよひと夜よろつに契かたらひあかし給ふつくろふへきところ　くのあつかりいまくはへたるけいしなとにおほせらるかつらの院にわたり給ふへしとありけれはちかきみさうの人　くまいりあつまりたりけるもみなたつねまいりたりせむさいとものおれふしたるなとつくろはせ給ふこゝかしこのたていしともゝみなまろひうせたるをなさけありてしなさはおかしかりぬへきところかなかゝるところをわさとつくろふもあいなきわさなりさてもすくしはてねはたつときものうく心とまるくるしかりきなときしかたのこともものたまひいてゝなきみわらひみうちとけのたまへるいとめてたしあま君のそきてみたてまつるにおいもわすれもの思ひもはるゝ心ちしてうちゑみぬひんかしのわたとのゝしたよりいつるみつの心はへつくろはせ給とていとなまめかしきうちきすかたうちとけ給へるをいとめてたうゝれしとみたてまつるにあかのくなとの

あるをみたまふにおほしいてゝあま君はこなたにかいとしとけなきすかたなりけりやとて御なをしめしいてゝたてまつるき丁のもとにより給てつみかろくおほしたてたまへる人のゆへは御おこなひのほとあはれにこそおもひなしきこゆれいといたく思すまし給へりし御すみかをすてゝうきよにかへり給へる心さしあさからすまたかしこにはいかにとまりて思をこせ給ふらむとさま　くになむといとなつかしうの給すてはへりし世をいまさらにたちかへり思ひたまへみたるゝををしはからせ給ひけれはいのちなかさのしるしも思ひ給へしられぬるとうちなきてあらいそかけに心くるしうおもひきこえさせはへりしふたはのまつもいまはたのもしき御をひさきといはゐきこえさするをあさきねさしゆへやいかゝとかた　く心つくされはへるなときこゆるけはひよしなからねはむかしものかたりにみこのすみ給けるありさまなとかたらせ給ふにつくろはれたるみつのをとなひかことかましうきこゆ

すみなれし人はかへりてたとれともしみつはやとのあるしかほなるわさとはなくていひけつさまみやひかによしときゝ給ふ

いさらゐはゝやくのこともわすれしをもとのあるしやおもかはりせるあはれとうちなかめてたち給ふすかたにほひ世にしらすとのみおもひきこゆみてらにわたり給ふて月ことの十四五日つこもりの日おこなはるへきふけむかうあみたさかの念仏の三昧をはさるものにて又　くはへをこなはせ給ふへき事なとさためをかせ給ふたうのかさり仏の御具なとめくらしおほせらる月のあかきにかへり給ふありしよのことおほしいてらるゝおりすくさすかのきむの御ことさしいてたりそこはかとなくものあはれなるにえしのひ給はてかきならし給ふまたしらへもかはらすひきかへしそのおりいまの心ちし給ふ

ちきりしにかはらぬことのしらへにてたえぬ心のほとはしりきや女

かはらしと契しことをたのみにてまつのひゝきにねをそへしかなときこえかはしたるもにけなからぬこそは身にあまりたるありさまなめれこよなうねひまさりにけるかたちけはひえおもほしすつましうわか君はたつきもせすまほられ給ふいかにせましかくろへたるさまにておいゝてむか心くるしうくちをしきを二条の院にわたして心のゆくかきりもてなさは後のおほえもつみまぬかれなむかしとおもほせとまた思はむ事いとをしくてえうちいて給はてなみたくみてみたまふおさなき心ちにすこしはちらひたりしかやうやうゝちとけてものいひわらひなとしてむつれたまふをみるまゝににほひまさりてうつくしいたきておはするさまみるかひありてすくせこよなしとみえたりまたの日は京へかへらせ

給ふへけれはすこしおほとのこもりすくしてやかてこれよりいて給ふへきをかつらの院に人　くおほくまいりつとひてこゝにも殿上人あまたまいりたり御さうすくなとしたまいていとはしたなきわさかなかくみあらはさるへきくまにもあらぬをとてさはかしきにひかれていて給ふ心くるしけれはさりけなくまきらはしてたちとまり給へるとくちにめのとわか君いたきてさしいてたりあはれなる御けしきにかきなてたまひてみてはいとくるしかりぬへきこそいとうちつけなれいかゝすへきいとさとゝをしやとのたまへははるかに思たまへたえたりつるとしころよりもいまからの御もてなしのおほつかなう侍らむは心つくしになときこゆわか君てをさしいてゝたち給へるをしたひ給へはついゐたまひてあやしうものおもひたえぬ身にこそありけれしはしにてもくるしやいつらなともろともにいてゝはおしみたまはぬさらはこそ人心ちもせめとのたまへはうちわらひて女君にかくなむときこゆ中　くもの思ひみたれてふしたれはとみにしもうこかれすあまり上すめかしとおほしたり人　くもかたはらいたかれはしふ　くにゐさりいてゝき丁にはたかくれたるかたはらめいみしうなまめいてよしありたをやきたるけはひみこたちといはむにもたりぬへしかたひらひきやりてこまやかにかたらひ給ふとてとはかりかへりみ給へるにさこそしつめつれみをくりきこゆいはむかたなきさかりの御かたちなりいたうそひやき給へりしかすこしなりあふほとになり給ひにける御すかたなとかくてこそもの　くしかりけれと御さしぬきのすそまてなまめかしうあいきやうのこほれいつるそあなかちなるみなしなるへきかのとけたりしくら人もかへりなりにけりゆけひのせうにてことしかうふりえてけりむかしにあらため心ちよけにて御はかしとりによりきたり人かけをみつけてきしかたのものわすれしはへらねとかしこけれはえこそうら風おほえ侍つるあか月のねさめにもおとろかしきこえさすへきよすかたになくてとけしきはむをやへたつ山はさらにしまかくれにもおとらさりけるをまつもむかしのとたとられつるにわすれぬ人もゝのし給ひけるにたのもしなといふこよなしやわれも思ひなきにしもあらさりしをなとあさましうおほゆれといまことさらにとうちけさやきてまいりぬいとよそほしくさしあゆみ給ふほとかしかましうをひはらひて御車のしりに頭中将兵衛督のせたまふいとかる　くしきかくれかみあらはされぬるこそねたうといたうからかり給よへの月にくちをしう御ともにをくれ侍にけるとおもひ給へられしかはけさきりをわけてまいり侍つる山のにしきはまたしう侍りけりのへの色こそさかりにはへりけれなにかしのあそむのこたかにかゝつらひてたちをくれ侍ぬるいかゝなりぬらむなといふ

けふは猶かつらとのにとてそなたさまにおはしましぬにはかなる御あるしとさはきてうかひともめしたるにあまのさへつりおほしいてらるのにとまりぬるきむたちことりしるしはかりひきつけさせたるおきのえたなとつとにしてまいれりおほみきあまたゝひすむなかれてかはのわたりあやうけなれはゑひにまきれておはしましくらしつをの　く絶句なとつくりわたして月はなやかにさしいつるほとにおほみあそひはしまりていといまめかしひきものひはわこむはかりふえとも上すのかきりしておりにあひたるてうしふきたつるほとかは風吹あはせておもしろきに月たかくさしあかりよろつの事すめるよのやゝふくるほとに殿上人四五人はかりつれてまいれりうへにさふらひけるを御あそひありけるついてにけふは六日の御ものいみあくひにてかならすまいり給へきをいかなれはとおほせられけれはこゝにかうとまらせ給にけるよしきこしめして御せうそこあるなりけり御つかひはくら人の弁なりけり

　月のすむかはのをちなる里なれはかつらのかけはのとけかるらむうらやましうとありかしこまりきこえさせ給ふうへの御あそひよりもなをところからのすこさそへたるものゝねをめてゝまたゑひくはゝりぬこゝにはまうけのものもさふらはさりけれはおほゐにわさとならぬまうけのものやといひつかはしたりとりあへたるにしたかひてまいらせたりきぬひつふたかけにてあるを御つかひの弁はとくかへりまいれは女のさうすくかつけたまふ

　ひさかたのひかりにちかき名のみしてあさゆふきりもはれぬ山里行幸まちきこえ給ふ心はへなるへし中におひたるとうちすんし給ふついてにかのあわちしまをおほしいてゝみつねかところからかとおほめきけむことなとの給ひいてたるにものあはれなるゑいなきともあるへし

　めくりきてゝにとるはかりさやけきやあはちのしまのあはとみし月頭中将うき雲にしはしまかひし月かけのすみはつるよそのとけかるへき左大弁すこしおとなひてこ院の御ときにもむつましうつかうまつりなれし人なりけり

　雲のうへのすみかをすてゝよはの月いつれのたにゝかけかくしけむ心　くにあまたあめれとうるさくてなむけちかうゝちしつまりたる御物かたりすこしうちみたれてちとせもみきかまほしき御ありさまなれはをのゝえもくちぬへけれとけふさへはとていそきかへり給ふものともしなしなにかつけてきりのたえまにたちましりたるもせむさいのはなにみえまかひたるいろあひなとことにめてたし近衛つかさのなたかきとねりものゝふしともなとさふらふにさう　くしけれはそのこまなとみたれあそひてぬきかけ給ふ色色秋のにしきを風のふきお

ほふかとみゆのゝしりてかへらせたまふひゝきおほゐにはものへたてゝきゝてなこりさひしうなかめ給ふ御せうそこをたにせてとおとゝも御心にかゝれりとのにおはしてとはかりうちやすみ給ふ山さとの御物かたりなときこえ給ふいとまきこえしほとすきつれはいとくるしうこそこのすきものともたつねきていといたうしひとゝめしにひかされてけさはいとなやましとておほとのこもれりれいの心とけすみえ給へとみしらぬやうにてなすらひならぬ程をおほしくらふるもわるきわさなめりわれはわれと思なし給へとをしへきこえ給ふくれかゝるほとに内へまいり給ふにひきそはめていそきかき給ふはかしこへなめりそはめこまやかにみゆうちさゝめきてつかはすをこたちなとにくみきこゆそのよはうちにもさふらひ給ふへけれとゝけさりつる御けしきとりに夜ふけぬれとまかて給ひぬありつる御かへりもてまいれりえひきかくし給はて御らんすことににくかるへきふしもみえねはこれやりかくし給へむつかしやかゝるものゝちらむもいまはつきなきほとになりにけりとて御けうそくによりゐ給ひて御心のうちにはいとあはれに恋しうおほしやらるれはひをうちなかめてことにものものたまはすふみはひろこりなからあれと女君みたまはぬやうなるをせめてみかくし給ふ御ましりこそわつらはしけれとてうちゑみ給へる御あいきやうところせきまてこほれぬへしさしより給ひてまことはらうたけなるものをみしかはちきりあさくもみえぬをさりとてものめかさむほともはゝかりおほかるに思ひなむわつらひぬるおなし心におもひめくらして御心に思さため給へいかゝすへきこゝにてはくゝみたまひてんやひるのこかよはひにもなりにけるをつみなきさまなるも思ひすてかたうこそいはけなけなるしもつかたもまきらはさむなとおもふをめさましとおほさすはひきゆひたまへかしときこえ給ふおもはすにのみとりなし給ふ御心のへたてをせめてみしらすうらなくやはとてこそいはけなからん御心にはいとようかなひぬへくなんいかにうつくしきほとにとてすこしうちゑみ給ひぬちこをわりなうらうたきものにしたまふ御心なれはえていたきかしつかはやとおほすいかにせましむかへやせましとおほしみたるわたり給こといとかたしさかのゝみたうの念仏なとまちいてゝ月にふたたひはかりの御ちきりなめりとしのわたりにはたちまさりぬへかめるをゝよひなきことゝおもへとも猶いかゝものおもはしからぬ